

鹿児島県指定有形文化財 「川邊コレクション」調査報告（その1）

—紀行文『鮮満北支行』が語る、朝鮮・満洲おもちゃ旅—

吉井 秀一郎

Key Word：川邊正己，須知善一，清永完治，『土偶』，『土偶志』，小野正男，釜山，慶州，京城



写真1 鹿児島県指定有形文化財 玩具コレクション「川邊コレクション」
（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）

1 はじめに

鹿児島県歴史資料センター黎明館（以後：黎明館）は、鹿児島市で暮らしていた、故 川邊正己氏（以後：川邊）によって蒐集された鹿児島県指定有形文化財の玩具コレクション（以後：「川邊コレクション」）を所蔵している。

この「川邊コレクション」（写真1）が蒐集された時期は、満州事変から太平洋戦争（当時は大東亜戦争）、そして終戦の頃までの激動の時代である。資料は鹿児島県内や全国各地の土人形、その他の郷土玩具、中国大陸の満州（現中国東北部）や華北地方、朝鮮半島、台湾、インドネシア、タイ、インドの人形や仮面等、東アジアの玩具が中心で、玩具だけでも4408点、文献、おもちゃ絵、版画などを加えると8743点にもなり、高い質と豊富な量を誇るコレクションといえよう。なかでも朝鮮と満洲の玩具は、質と量ともに充実している。

しかし、川邊が朝鮮・満洲の玩具を蒐集していく過程と方法については、今まであまり明らかになっていなかった。そこで、川邊が朝鮮・満洲等を旅したときの体験を記した『鮮満北支行』を手掛かりに、これを75年の時を越えて、改めて読み解き、彼の朝鮮・満洲での足跡をたどることにす

る。なぜなら、そうすることで、川邊と、そこに暮らしていた玩具蒐集家との出会いや交流の様子、そして、彼が朝鮮・満州の玩具に対して、どのように考え、感じていたかを知ることができる考えたからである。

激動の時代を生き、貴重なコレクションを後世に伝えた川邊へ敬意の念を込めつつ、まず鹿児島市から京城府（現：ソウル）までの足跡をたどることにする。

2 『鮮満北支行』とは

『鮮満北支行』は、昭和13年に川邊が朝鮮・満州・北支を旅行した際の出来事などを記した紀行文で、玩具蒐集家同士の交流の様子、そこで生活する人々の様子、日本とは異なる文化が築き上げた史跡等を観覧した際に考えたこと、旅行先で見かけた玩具に対する評価等が記録されている。

『鮮満北支行』は、昭和13年に同好会誌『土偶志』第四期第三號（1938）の誌面で発表されてから、5回に分けて、昭和16年の『土偶志』第七卷第壹號（1941）まで掲載された。

それでは、『鮮満北支行』が掲載されていた『土偶志』とは、どのような同好会誌であったのか、概略を記すこととする。

3 同好会誌『土偶志』とは

『土偶志』は当初、『土偶』として、著作兼発行人清永完治（写真12）、発行所釜山郷玩同好会（釜山府土城町壱丁目六番地）の名で、昭和10年7月18日に会員限定非売品として刊行された。創刊號の内容は、郷玩写真に解説をそえるもので、三春駒（片岡、清永蔵）、延岡の昇り猿（波多野蔵）、支那面（片岡蔵）、久の浜の張子馬（清永蔵）、花巻人形（三代蔵）、東京張子馬（清永蔵）、西尾雷除土鈴（石橋蔵）、名古屋笠寺の藁馬（清永蔵）、花巻首人形（三代蔵）、屋島與一駒（片岡蔵）を取り上げ、所有者が解説文を付けて、自分のコレクションを紹介する内容であった。

発行人の清永は、創刊號の「編輯餘話」で創刊の理由を、「世間一般の重々しく厳しい会と異いどこ迄も趣味中心の碎けた俗塵離れのしたもので他に比のない会としてお互いに自慢出来る訳です。土偶は我々の機関紙であり、趣味の結晶であるから同人各位の気分なり感じなり大いに原稿を書いて頂きたい」と述べている。

このように、清永は釜山郷玩同好会を、今までにない誰でも楽しく郷土玩具について語り合う場とし、同好会誌『土偶』を、同じ趣味や志を持つ仲間から広く原稿執筆を求めるものにした。会の運営方針を打



写真2 『土偶』・『土偶志』全巻
〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

ち出している。

この運営方針は、発行を重ねるにつれて郷土玩具蒐集家たちに広く浸透し、発行部数と寄稿者の増加につながった。そして、昭和10年の創刊号発行から、昭和17年8月10日の第七期第二号（休刊号）までの七期20冊（号）、発行予定数が満たされ世に出たとすると、延975冊を発行するに至ったと考えられる。

途中、『土偶』から『土偶志』へと誌名を改めて再出発しているが、その理由を『土偶志』第三期二號（1937）の「編輯餘話」で、「本誌より板さんのご注意により改題『土偶志』としました、志は誌と同一意味でして二一劃の吉数を撰び、幸慶を壽ぎ大飛躍を記念する意からであります」と述べている。つまり、改題の主旨は同好会誌の大躍進を願い板 祐生氏（以後：板）の助言から、三文字合計の画数が吉数の二十一画となる「志」を選び『土偶志』と改名したのである。この『土偶』・『土偶志』を合わせた全てを黎明館は所蔵している（写真2）。

4 川邊と『土偶』、『土偶志』との関わり

それでは、川邊と『土偶』・『土偶志』との関わりは、いつどのようにして始まったのだろうか。

川邊が最初に『土偶』へ寄稿したのは、『土偶』第三期一號（1937）の「垂水の土偶」の解説文からである（写真3）。清永は、その第三期第一號「編輯餘話」の中で、川邊が「垂水の土偶」について解説文を寄稿したことに対して、「板さん小野さんを初め鷺見さん伊藤さん加藤さん梅林さん川口さん川邊さんと大變な御後援を頂き大躍進を以つて御目見榮することになりこんな愉快なことはありません。茲に厚く御禮を申し上げます」と御礼の言葉を掲載している。

川邊が「垂水の土偶」解説文を寄稿したことが、両者の目に見える交流の始まりであった訳だが、どのような経緯から、寄稿することになったのか不明であったので、さらに資料調査を進めた。

すると、釜山府と鹿児島市の玩具蒐集家同士が交流を持つに至った経緯が、次第に明らかになってきた。その手掛かりの一つは、川邊へ宛てられた手紙で、差出人は久留米の蒐集家小野正男（以後：小野）である。

その手紙は、1月26日付けで小野から川邊に宛てて出されたものである（手紙資料1）。紛失によるためか、封筒が添

えられていないので、消印から昭和何年の1月26日であるか、確認はできなかったが、手紙に記された内容が、昭和12年2月28日に発行された『土偶』第三期一號に強く反映されていることから、発行前の昭和12年1月26日



写真3 『土偶』第三期一號表紙及び「垂水の土偶」解説文掲載頁（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）

付けで出されたものと考える。

この手紙で、小野は川邊に次の三つのことを伝えている。

- (1) 小野が、清永に代わり、川邊に「垂水の土偶」写真解説の原稿執筆依頼をしていること。
- (2) 小野が、清永へ川邊を紹介し、併せて両者の玩具蒐集家としての交流をすすめたのだということ。
- (3) 清永は、大連の玩具収集の第一人者である須知善一（以下：須知）と交流があるのだということ。

(1)～(3)により、川邊は小野に依頼されて『土偶』に寄稿し、小野の紹介で、釜山府の清永が主宰する釜山郷玩同好会の持つ人脈への参加が叶ったということ。そして小野の仲介で、大連の須知、釜山の清永、鹿児島島の川邊、この三者の人脈がつながったことがわかる。

加えて、川邊と小野の交流について、他の手紙を読み解き、調査を重ねた。

5 小野と川邊の交流

小野は、川邊に宛てた3月9日付けの手紙の中で、次のことを記している（手紙資料2）。

- (1) 小野は、川邊が『土偶』を既刊の分まで清永から受け取ったことと、『土偶志』の会賓としてデビューしたことを喜んでいるということ。
- (2) 小野は、板の紹介で清永と交流を持ち始め、『土偶志』の会賓として遇されて恐縮しているのだということ。
- (3) 小野が行っているように、川邊も釜山郷玩同好会に会費等を支払う代わり、地元の郷土玩具の贈呈、鹿児島・宮崎地方の郷土玩具についての解説、愛玩家訪問記などを『土偶志』へ寄稿してはどうかということ。

つまり、小野は川邊に釜山郷玩同好会の会賓としての積極的な参加と、玩具の贈呈、寄稿を勧めていたのである。

この手紙の内容と、川邊から『土偶志』への寄稿が頻繁になるのが、昭和12年5月28日発行の『土偶志』三期二號からであることや、小野が昭和12年8月1日に応召し、陸軍の軍務につくために久留米を離れていることから、久留米から手紙を郵送することが可能であった時期は、昭和12年8月1日以前に限定されるので、手紙は昭和12年3月9日付けで出されたものであると考える。

6 『鮮満北支行』における川邊の足跡

(1) 出発の動機

近頃御無沙汰いたしております。じつはこの五月中旬東京のさる会合へ出席の予定でありましたが、ちょうど周囲の都合が好いようですので、東京の会合への出席をお断りして、急に長年の待望の鮮満旅行に出かける事にいたしました。（中略）

風俗の異なった鮮満の生活や遺跡やらも見學したいですし又満洲方面はまだ娘々祭が二三残つてゐまして、その祭に間に合ひそうでもありますので、其處で入手出来る郷玩に一縷の望みをも囁まして、それにずつと以前からは非來る様にといつもすゝめて下さる大連の須知兄の御招きにも應ずる譯になりますので。

それこそ一石三鳥で横着な奴だと御叱りを受けるかもしれませんが、多分十五日頃出發する事になりませう。

（『土偶志』・第四期三號 『鮮満北支行』より引用）

川邊は高校以来の玩友F兄へ宛てた手紙を自身で引用掲載し、鮮満旅行に旅立つことに決めた動

機を次の4点上げている。

- ア 時期的に周囲の都合がよい。
- イ 風俗の異なった朝鮮や満州の生活や遺跡などを見学したい。
- ウ 満州方面の娘々祭に出向き、そこで郷土玩具を手に入れたい。
- エ 大連の須知の招待に応じたい。

また、これを釜山の清永、大連の須知に知らせたところ、よい答えを貰っていることも添えている。

(2) 鹿児島出発から関門連絡線乗船まで (昭和13年5月15日)

五月十五日
 午後零時五十分の急行で出発しました。いつもの旅立ちの様に虎の軸物をかけ、熱い茶を飲んで家内一同で送り出してくれました。『虎は千里駆け戻る』の云ひから私が無事旅行を終えて帰へるやうにとの願ひからであります。午後九時五分門司駅に着きました。夜の関門は雨が降り、そのうえ、かなり激しい風が吹いておりましたが、連絡線の上から見る雨にけぶった町々の灯りは、なんだか、かえって旅愁をそそのもるものがありました。
 (『土偶志』・第四期三號 『鮮滿北支行』より引用)

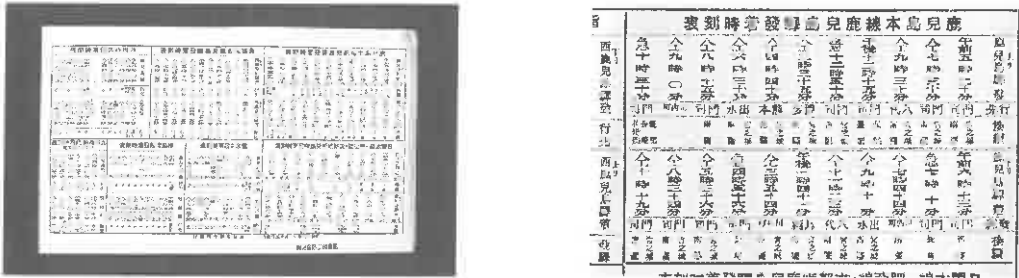


写真4 鹿児島市を中心とする汽車汽船発着時刻表 鹿児島市観光課 (昭和14年11月15日改正) (鹿児島県立図書館蔵)

『鹿児島市を中心とする汽車汽船発着時刻表』は、川邊が鹿児島を出発した昭和13年5月15日に一番近い時期の、昭和14年11月の時刻表である(写真4)。別に『満洲・朝鮮復刻時刻表』(日本鉄道旅行地図帳編集部2009:新潮社)でも確認することができたが、同じ12時50分鹿児島発、午後9時5分門司着の急行門司行が記載されている。川邊は「午後零時五十分の急行で出発」と記しているので、この急行列車に乗り、鹿児島駅から鮮満旅行に出発したと考える。

午後9時5分に門司港駅に着いた川邊は、朝鮮半島の釜山府に渡航するために、関門連絡線に乗船し下関港に向かった。その船上で、5月15日深夜の情景を、「夜の関門は雨が降り、そのうえ、かなり激しい風が吹いておりましたが、連絡線の上から見る雨にけぶった町々の灯りは、なんだか、かえって旅愁をそそのもるものがありました」と旅愁に浸るかのよう記している。

残念ながら、出発に際し川邊家に掲げられた虎の軸物は、黎明館所蔵の「川邊コレクション」には含まれていない資料なので、確認することができなかった。

(3) 下関港出港

五月十五日
 無事下関に着き、トランクを提げて廊下を船へと急ぎました。人影のまばらな電燈の薄暗い長い長い廊下で途中満鮮見学にでも行くのか中等学校の生徒が円陣をつくって何か先生からお話を聞いておりました。船の二等室は凄ほどの満員で、やっとボーイの世話で割りこましてもらいましたが寝たっきり身動きも出来かねるほどの席で、これ一夜を過ごすのかと思いますとやはりいささかうんざりせざるを得ませんでした。それでも身を横たえたなり、何時船が出航したのやらもわからず。そのまま寝入ってしまいました。
 (『土偶志』・第四期三號 『鮮滿北支行』より引用)

川邊が乗船した、昭和13年5月当時の関釜連絡線には、2隻の7,000t級の大型客船が就航していたので、ゆったりとした船旅を思い描いていたのかもしれない(表1)。

しかし、満州事変(1931)以降の大陸情勢の変化、釜山と奉天間を結ぶ急行「ひかり」の運行(1933)、昭和恐慌からの景気回復、日華事変の勃発(1937)などから、大陸と日本との往來が非常に活発な時期であったので乗客がとても多く、二等室のあまりの混雑振りに狼狽している様子が記されている。

川邊は、出港時刻を記していないが、何時出航の関釜フェリーで釜山を目指したのであろうか。『日本国有鉄道百年史8』(1971)に、「昭和11年11月から金剛丸が就航したため、同年12月1日から客便の時刻改正を行ない、7便は下関発

22時30分、釜山着6時、8便は釜山発23時30分、下関着7時15分、1便は下関発10時30分、釜

山着18時、2便は釜山発11時45分、下関着19時30分となったが、7便は30分短縮して下関・釜山間を7時間30分で運行した。(p366・6～10)」と記載されていることや、鹿児島発の急行列車が門司駅に21時05分に到着することから、22時30発の釜山港行きであろう。

ところで、川邊が払った運賃は、2等客室に乗船して、寝台は使わず大部屋を使用したと見積もれば、旅客運賃7円10銭、現在の通貨価値で21,000円程度を支払っての船旅であった(表2)。

(4) 釜山港入港から清永との出会い(昭和13年5月16日)

五月十六日

いよいよ、朝鮮へ一歩をしるす日です、好い天気でしたが、此の天気が一方禍いしたのですから変なものです。天気がよいため霧が深く、はれるまでは港へ入れないと釜山港外に、一時間以上船は仮泊を余儀なくされてしまいました。船上から見た朝鮮の風景は内地のいづれともあまり変わったものではありませんでした。・・・(中略)・・・下船するや待合室でお迎えに来て下さっているはずの清永さんをお探しましたが、それらしいお姿も見受けず。暫時待った後、思い切って駅を出て、自動車をかけて清永さんのお宅をご訪問いたしました。・・・(中略)・・・奥様からお聞きするところによりますと、私を迎えにわざわざ港へおいでになったとの事です。・・・(中略)・・・その中清永さんが帰ってこられました。コケシを持ってお出迎えに来て下さいましたそうで、このお話をお聞きまして、いつか梅林さんが停車場に誰かをお迎えに行かれた時、何か玩具を棹の先につけて行かれたとの事を思い出しました。

(『土偶志』・第四期三號 『鮮滿北支行』より引用)

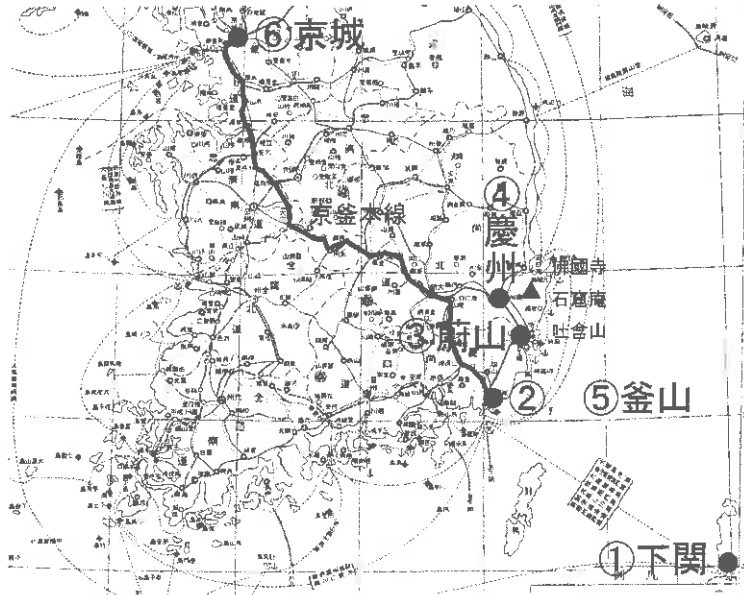


図1 川邊正己旅行図
(朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地図集成：柏書房)

表1 関釜連絡船金剛丸型資料(昭和13年当時)

船名	金剛丸	興安丸
発注	昭和10年	昭和10年
発注先	三菱重工業株式会社	三菱重工業株式会社
起工	昭和10年11月6日	昭和11年3月14日
竣工	昭和11年10月31日	昭和12年1月18日
就航	昭和11年11月16日	昭和12年1月31日
総トン数	7080	7080
旅客定員	1746	1746
速力	23.193	
備考	客室には、各等ともにキャリヤー式冷房装置を採用。	

表2 下関・釜山間航路旅客運賃

改正年月日	1等		2等		3等		備考
	円	銭	円	銭	円	銭	
大正7年7月16日	12.	00	7.	50	3.	75	食事付
大正9年9月1日	10.	65	7.	10	3.	55	食事含まない
大正13年11月15日	12.	15	7.	10	3.	55	1等運賃は寝台料を加算

日本国有鉄道百年史8 p368 (引用)

『鮮滿北支行』には、釜山港の第一浅橋（図2-①）に着岸したフェリーから下船した後、そこで清永と待ち合わせていた川邊が、釜山駅で清永に会えずに、一人清永宅へ向かう様子や、清永宅を尋ねた川邊と清永婦人とのやりとりなどが記されている。



図2 川邊正己訪問地位置図（釜山）（1：10,000）
（朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地図集成：柏書房）

そこには、面識のない玩具蒐集家同士が待ち合わせるとき、「日印となる玩具を持ち、その場に立つ」という待ち合わせ方法が記されている。清永は「コケシ」を持参したらしいが、とてもユーモラスなその姿を、残念ながら川邊は、見逃してしまったらしい。

以前、清永から川邊に宛てられた手紙によると、清永宅の住所は「釜山府大倉町二丁目九」と書かれているので、川邊は、おそらくそこに向かったのであろう。大倉町（図2-③）は、釜山駅から南西に直線距離300m程に位置し、昭和13年に釜山府が編纂した『釜山府勢要覧』によると、釜山府全体の日本人人口59,014人の約3.5%の2,280人が暮らす市街地で、日本人の割合が非常に多い商業地であった。

(5) 清永宅から龍頭山神社参拝まで（昭和13年5月16日）

釜山に一泊の予定でありましたので、・・・(中略)・・・清永さんの御宅に一泊させて頂く事になりました。土偶志の爲かねて求められてました馬玩具の版畫を自分で直接持つて来ましたので其の版畫を御渡し又手土産の印に持つて来ました宮ノ城立女と帖佐の土鶏とを差上げました。書前一緒に御宅を出まして先龍頭山神社に参拝致しました。・・・(中略)・・・清永さんの御店の大池商店の前を経て成功堂の石橋さんを御訪問致しました、・・・(中略)・・・清永さんの御宅に歸へり御書齋で紀念の寫眞を撮りました。三方の棚から天井迄一杯の玩具で特に朝鮮の玩具はさすがに御立派なものでした。・・・(中略)・・・木馬洞と名乗られるだけに又馬に関する玩具の豊富さには一驚しました。・・・(中略)・・・ここで見せて頂いた鮮玩の古いものはとても味の深いものでしたが、之に對して近頃の復興品の御粗末さは實に慨しいと思ひます。もっと念入りに復興されないものだろうと思ふのは私のみではありません。形にしても色彩にしてもどうも之では比較になりません。・・・(中略)・・・見た事もなければ、聞いた事もない馬玩具が整然とずらりと並んでゐるのには驚かずにはおられません。又清永さんや小野さんにすすめられて今度始めたばかりの版畫に就ても一々手にとって御教示を頂いた事は嬉しい事でした。・・・(中略)・・・第二小學校の片岡先生がその中御訪問になり、・・・(中略)・・・此の日一日早朝から私の爲に御多忙の中をおさき下さつた清永さんに對しましては何とも御禮の云ひ様もありません。朝鮮への最初の一步も町で朝鮮服を最初一寸變に感じた位で殆ど内地と變つた氣分を味わひませんでした。位置が内地に最も近い關係かもしれませんけど。(未完)

（『土偶志』・第四期三號 『鮮滿北支行』より引用）

この日、川邊が清永へ手渡した「馬玩具の版畫」は、さっそく『土偶志』第四期二號（1938）誌上に掲載されている。その号の「編輯餘話」には、「玩父板さんの御提唱で、玩友小野富久呂洞兄の慰問號に引續き本號を軍馬を偲ぶ號とし、加藤さんにお願ひして題言迄頂いた次第であります。そうして次號は軍用鳩、それから軍用犬を偲ぶ號として版畫面を鳩次に犬として本年中に後二冊を萬難を排して出します」とあり、そのような編集者の趣旨にそって「馬玩具の版畫」を持参したのであろう。誌上では、川邊の描いた版画、「大阪四天王寺の張子馬」、「高松の土馬 兵隊乗」、「ハルビンの泥馬」の三枚が、誌上を賑わせている（写真5～7）。また、この三点の版画のモデルは、それぞれ「大阪四天王寺練物馬」、「桑名馬乗鎮台」、「泥馬」という資料名を与えられ、黎明館に収蔵されている（写真8～10）。



写真5 大阪四天王寺の張子馬
写真5～7 『土偶志（第四期二號）』
（鹿兒島県歴史資料センター黎明館蔵）



写真6 高松の土馬兵隊乗



写真7 ハルビンの泥馬



写真8 大阪四天王寺練物馬



写真9 桑名 馬乗鎮台



写真10 泥馬

写真8～10
（鹿兒島県歴史資料センター黎明館蔵）

この日の宿を、清永宅にお世話になることに決めた川邊は、昼前に清永と一緒に朝鮮最古の神社である龍頭山神社（図2-④）に参拝したのち、清永の玩具コレクションに触れる機会を得たようだ。特に朝鮮玩具と馬玩具の質の高さと豊富さに驚愕すると同時に、復興品の玩具に対しては「御粗末さを残念」に感じたことを記している。

川邊に朝鮮玩具コレクションと馬玩具を見せた清永であるが、清永自身は朝鮮玩具について、どのような考えを持っていたのだろうか。清永は昭和14年10月28日に釜山放送局より全鮮放送した『朝鮮の郷土玩具』の原稿に、多少の補筆を行い『朝鮮の郷土玩具』土偶志臨時号（1939）を刊行しているが（写真11）、その中で朝鮮の玩具について、「朝鮮は日本や中国に比べて、玩具の種類や数が少ない」と感想と自己の研究成果を述べ、その理由を2つあげている。

ア 李朝時代、とくに燕山君以後の圧制のため。

イ 儒教の影響から、悪鬼が乗移るなどといわれ、宵越を忌み翌日に持ち越すことがほとんどなく壊されたため。

しかし、愛知県で生まれ、大阪医科大学の笠原小児保健研究所において「育児上の縁起に関する玩具研究」をテーマに研究を進めていた小児科医、尾崎清次（以後：尾崎）は、異なった考えを持っていた。尾崎の著した『朝鮮玩具圖譜』（1934）によると、「朝鮮は一般的には玩具が少ないと言われているが、玩具が少ないのではなく、玩具を眼にする機会が少ないのである」と述べている。そして、その理由を2つあげている。

ア 子供たち自身で作った手作玩具が中心で、玩具専門の商人がほとんどいないため、店頭に並ぶ時期も限られ、旅人の目に触れることも少ないため。

イ 材料は素麵粉製がほとんどで虫食いの被害に会いやすく、十二年もすれば跡形も無くなってしまい、人の目に触れる機会が少ないため。

この、「朝鮮は玩具が少ないところである」という評価に対して、川邊がどのような考えを持っていたのかを知ることができる資料として、鹿児島県立加治木高等学校図書委員会がまとめた、『この道ひとすじ 郷土玩具収集』（1987）（写真13）を上げたい。これは、川邊と図書委員との対談をまとめたもので、川邊は対談の途中で、「日本の玩具はどこ国のものと似ていますか、やはり近い韓国や朝鮮ではないですか」と質問され、「朝鮮には、玩具が宵、つまり一夜を越すと人が死ぬという迷信があり、壊していたので玩具は少ない」と答えたと記されている。川邊は、尾崎よりも清永に近い考えを持っていたことがわかる。



写真11 『朝鮮の郷土玩具』（1939）表紙 写真12 清永 完治氏 『朝鮮の郷土玩具』 写真13 『この道ひとすじ 郷土玩具収集』（1987）
写真11～13（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）

(6) 釜山から蔚山を経由し佛國寺に至る（昭和13年5月17日）

五月十七日

清永さんに御聞きして急に決めました日取りによつて今日佛國寺へ行く日です。清永さんに見送られまして驛前から慶州行きのバスに乗込みました。・・・（中略）・・・正午過ぎ蔚山で停車しばらく休みました、加藤清正で名高い處ですが、その後を忍ぶ暇がなかつたのは残念です、佛國寺駅前バスを降り・・・（中略）・・・佛國寺驛で自動車乗りかへ、佛國寺へ向かひました。佛國寺に着く頃からポツポツ小雨が降つて参りました。佛國寺は人影もまばらで淋しい古びた寺でした。

千五百餘年前の建立だそうで石橋とでも云ひたい石階を渡り、多寶塔と釋迦塔を拜見し本堂の極楽殿に入りました。之が朝鮮寺堂建築の一風なのでせうか配合された棟木の構成美丹緑のあざやかさ。大きな木彫の金色の佛像の前にしほし佇んで我を忘れて見入りました。

（『土偶志』・第五期一號 『鮮滿北支行（其ノ二）』より引用）

佛國寺は大韓民国の慶尚北道慶州市にあり、現在ユネスコの世界遺産に石窟庵とともに登録されている。

当時の旅行案内誌『朝鮮滿洲旅の栞』（南滿洲鉄道東京支店1939）によると、「佛國寺驛の北方三

軒半、吐含山の中腹にあつて今から千五百餘年前義道と云ふ人によつて開創され後新羅第二十三代法興王の時重創したものが烏有に歸し第三十五代景德王の世國宰金大城が更に重修し多寶釋迦の二塔を建て、石壇を築き奇巧を極めた石段を設け東を青雲、白雲橋、西を七寶蓮華橋と稱し、大雄殿を中心に樓堂伽藍五十有餘が並び建ち偉



資料1 大修理前の仏国寺の様子
『朝鮮宝物古蹟図録, 第1』

觀を呈して居つたが、李朝時代岳火に罹り木造建築物を灰燼に歸した。現存の木造物はその後建築されたものの一部で木石混用配置の妙麗さは遺物中の随一と言はれてゐる。大雄殿内にある銅造の二佛身は姿勢雄偉面相絶麗でその裏にある舍利石塔と共に當代の代表作品と言はれて居る。尚佛國寺へは佛國寺驛から乗合自動車の便がある。(片道一人三十錢)」と紹介されており、有数の観光名所となつていたことがわかる。佛國寺の創建は、新羅の法興王の時代(528年頃)と伝えられるが、景德女王10年(751)年に拡充され、現在に伝わる伽藍配置になつたらしい。しかし、木造建築部分は「李朝時代岳火に罹り木造建築物を灰燼に歸した」と記されているように、豊臣秀吉の文禄の役(1592年)による混乱の中で、大きな被害をうけてしまったのであろう。

今、あらためて大修理以前の様子を撮影した写真を見てみると(資料1)、石壇は崩れ、木造部分も部分的にしか残っていないので、長期にわたり本格的な修復が行われていなかった様子がわかる。

『朝鮮宝物古蹟図録, 第1』(朝鮮総督府編1940)では、「大正13年4月より大正14年8月にかけての朝鮮総督府による大修理で様子を一新したが、研究が不十分なために新羅の頃の構成や内容を再現し損じたものが無いわけではない」と修理後の様子を記している。あわせて、修理後の姿については、「修理はできたが復元については検討の余地がある」と厳しい意見があつたことが記されている。

ところで、川邊が、佛國寺駅から佛國寺まで乗った自動車が「乗り合い」であつたならば、運賃として30錢、現在の通貨価値で1,000円程度を支払つたことだろう。

(7) 佛國寺拝観の様子（昭和13年5月17日）

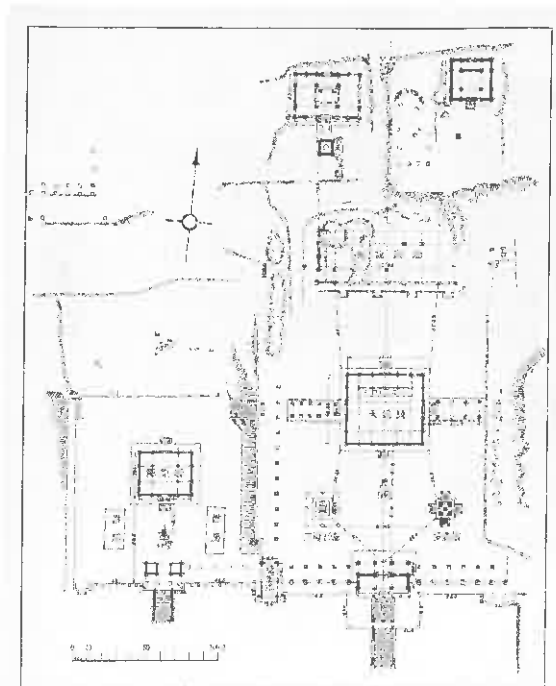


図3 『朝鮮宝物古蹟図録，第1』「現状実測図」
（昭13～15 朝鮮総督府編）
（国立国会図書館ホームページから転載）

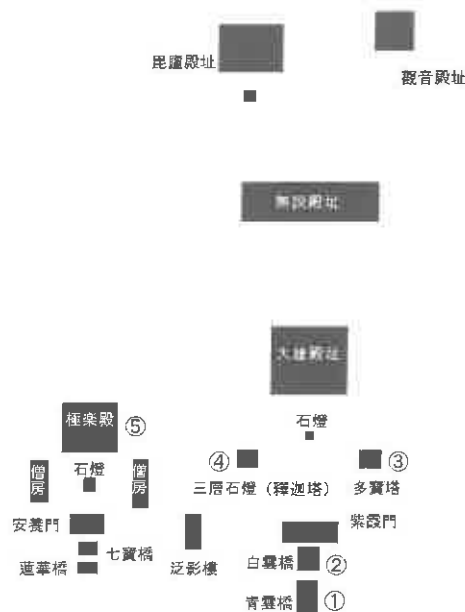


図4 川邊正己拝観順及び佛國寺伽藍配置図
（『朝鮮宝物古蹟図録，第1』4 佛國寺伽藍の配置の
文章を参考に作成）

当時の佛國寺の姿を偲びつつ、川邊が拝観した経路を、『鮮滿北支行（其ノ二）』の記述にもとづいて、「青雲橋」（図4-①）、「白雲橋」（図4-②）、「多寶塔」（図4-③）、「三層石塔（釈迦塔）」（図4-④）、「極樂殿」（図4-⑤）の順に、彼の足跡をたどることとした（図3、図4、写真資料2、写真資料3）。

まず、俗世から仏の世界に入ることの意味するといわれる、「青雲橋」，「白雲橋」を登って境内に入った際に、あまりの立派さに感動し、階段ではあるけれども、「石橋と言いたい程である」と、感想を書き添えている。

総督府による大修理が行われた後の姿を川邊は拝観しているので、それ以前の姿とはだいぶ趣が異なっていたのであろうが、修理後の姿を拝観した川邊は、「朝鮮寺堂建築の一風なのでせうか配合された棟木の構成美丹緑のあざやかさ。大きな木彫の金色の佛像の前にしばし佇んで我を忘れて見入りました」と満足した様子で記している。日本の建築様式とは異なる朝鮮寺堂建築独特の棟木構成の美しさ（屋根の形状全般と思われる）や、色彩のあざやかさに魅せられたのであろう。

現在の仏国寺は見事に整備されており、川邊が拝観した当時の「佛國寺は人影もまばらで淋しい古びた寺でした」という姿は、もう写真でしか見ることのできない古の姿である。



資料2 東南より見た青雲橋白雲橋を中心とする大観
資料2, 3 (『朝鮮宝物古蹟図録, 第1』(昭13~15 朝鮮総督府編)〈国立国会図書館ホームページから転載〉)



資料3 多寶塔

(8) 吐含山登山から石窟拝観まで (昭和13年5月17日)

佛國寺旅館に今夜一泊の旨を告げて、往復二時間との話に、幸い雨もやんだので忙いで坂道をよぢ吐含山の頂上へと向ひました。

羊腸たるつま先上りの坂道で久し振りの長歩きと一寸閉口しましたが、山頂での日本海方面の重疊たる山々の廣大な景色、其に途中で聞いた身にひしと迫る様なカッコー鳥の物淋しい聲。印象深いものがありました。頂上から間もなくして石窟庵に着きました。庵には未だ朝鮮の参拜客が澤山で、庵内正面の大佛よりも四方を圍む花崗岩への浮彫りの石佛の方が私には興味深く感ぜられました。既に入日近い頃とて忙いで下出の途につきました。佛國寺旅館の縁先から見た庭先の残りの芍薬の花も好ましく入日に照り寂然と暮れてゆく遠い山々から極手近な處迄の一眺に見渡される宏莊な高原らしい風景には感極つたと申しませうか、たゞ黙々としてじつとその霽圍氣を味ひました。思ひがけない時に恵まれ嬉しい気持ちで一杯でした。 (『土偶志』・第五期一號 『鮮滿北支行(其ノ二)』より引用)

川邊は、5月17日の宿泊場所を佛國寺旅館に決めた後、吐含山^{トハムサン}登山を行った。山頂に立ち、そこから見た、山々の頂が広がる景色に、強い印象を受けた様子や、カッコー鳥の物淋しい声がよほど旅の身にこたえたのか、幾重にも折れ曲がった、つづらおりの坂道の登山が難儀であったことを合わせて記している。

また、下山途中に石窟庵に立ち寄っている。『朝鮮宝物古蹟図録, 第一』の「21 石窟庵と石窟」によると川邊の拝観した石窟は、崖下の狭い平地に石を積み上げ、土で覆って築いたもので、東海へ向かって仏国の清浄境を作ったものである。その姿は、大正2年10月から大正4年8月、大正9年春から12年末にかけて行われた二度の修復工事を経た後のものであった(資料4~7)。

石窟内部を拝観したところ、朝鮮の人々が予想以上に多く、石窟庵内部の大仏は、見づらかったようである。そのせいであろうか内部の大仏より四方を圍む花崗岩に彫られた石仏に、強い興味を持ったと記している。

川邊は、鹿児島を出発してから3日目の旅が終わるこの日、旅にもだいぶ慣れてきたのであろうか、佛國寺旅館では夕暮れに包まれる周囲の風景に感極まりつつも、庭先の芍薬を愛でる気持ちを記している。



資料4 石窟外観



資料5 石窟外観修復前



資料6 石窟入口から本尊仏を望む



資料7 石窟入口修復前

資料4～資料7
〔『朝鮮宝物古蹟図録、
第1』昭13～15 朝鮮
総督府編〕引用

(9) 慶州での古蹟めぐり (昭和13年5月18日)

五月十八日

七時頃出発して八時前慶州に着きました。・・・(中略)・・・そして先芬皇寺へ行きました。ここに残る石塔は僅かに下部の三層をしか残してゐませんが、既に一千三百年からの年月を経たとは思われぬ位で、入口の彫刻の磨損は惜しいものでした。畑を抜けて雁鴨池及臨海殿址に降りましたものの昔の壮麗さをしのぶよすがともなるものは一つも無く先を忙いで月城址に石氷庫を訪れました。月城は昔可成り大きな城であつたらしい事を思われましたが、當時氷を貯へる爲にこんな立派な穴倉式の石庫が造られてゐた事は驚く可き事であります。次いで東洋最古の天文台と稱せられる臆星台を見ました。・・・(中略)・・・南川の川縁で降りて古い財買井といふ井戸をのぞき、南川橋を渡り間もなく新羅始祖以下四人の王及妃を祀つた五陵に参拝しました。・・・(中略)・・・やがて鮑石亭に参りました。ここは昔離宮の一部であつた處、曲水の宴で名高い處であります。・・・(中略)・・・然しながら思ひの外その規模は小さなものであります。現在東洋に残る唯一のもので、ここは又酒舞の最中百濟に攻められて景哀王がその妃と共に自害を遂げた處だそうで、新羅最後の哀史を語る遺蹟でもありました。・・・(中略)・・・半島統一の偉業をなし遂げた新羅第二十九代武烈王の陵に参拝しました。小松林に圍まれて小岡の如く盛り上つた陵で、その入口右側に有名な龜趺があります。龜趺と云ひ、其上に僅かに残る六龍寶珠の彫刻笠といひ、誠に巧緻を極めたもので驚く可きものがあります。・(中略)・鳳凰台等見て博物館慶州分館に参りました。・・・(中略)・・・又少数ではありましたが植輪の人や馬には植輪と玩具の関係から興味深く見せられるものがありました。正午過ぎ出発汽車にて釜山に引き返し、その夜九時過ぎの列車で清永さんに見送られまして一路京城へ向ひました。

(『土偶志』・第五期一號 『鮮滿北支行(其ノ二)』より引用)

現在の慶州は、2000年に「慶州歴史地域」として世界遺産に登録され、市内とその付近に広がる遺跡を保護・公開している。

川邊は、佛國寺駅を7時頃に出発し、8時前に慶州に着いた。そこは、西暦676年に唐の勢力を朝鮮半島から撤退させ、朝鮮半島統一を確立した新羅が都を置いた地である。その慶州を75年前に人力車に乗って旅した川邊の足跡を、川邊所有の『慶州の傳説』(大坂六村1938)(写真14)に掲載された写真(写真15～18)と、本文を参考に川邊の訪れた場所についての概要を記し、訪れた順に地図上でめぐることとする。

まず634年(新羅善徳女王3年)に創建され、新羅寺院の姿を伝える芬皇寺(図5-①)へ行き、現存する最古の新羅の建造物とされ、安山岩を煉瓦のように積み上げて造られている石塔、雁鴨池(図5-②)、かつては千人以上を収容できる大ホールであったと伝えられる臨海殿址(図5-③)をめぐった。次に新羅の王城の地であった月城址の石氷庫(図5-④)を訪れている。月城で

は、穴倉式で石造りの石水庫の立派さに驚いたとの記述が見られる。

次に東洋最古の天文台といわれる^{せんせいだい}膽星台(図5-⑤)を見学している。

膽星台は、新羅第二十七世善徳女王の時代に築か



写真14 『慶州の傳説』表紙



写真15 南山より月城を距て、慶州を望む

『慶州の傳説』(1938第七版 著：大坂六村)
〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

れた天文観測台で下部は地覆石、上部は花崗石で造られている。これを見た川邊は、この膽星台について、「之こそ新羅文化中の粹の一つと云へませう」と記すほどに感心したようである。

その後、人力車に乗って雞林(図5-⑥)を眺めている。雞林は、新羅王家の一つである、金氏始祖の^{アルチ}金閼智が金の小箱に入れられて見つかったところで、林の中で鶏の音がしたので確認したところ、男の子(閼智)を発見し、金の小箱から見つかったので姓を金としたという伝説がある。古来その伝説から雞林は朝鮮を意味する言葉として使われていたこともある。その雞林を眺めながら移動し、財買井(図5-⑦)という古井戸、新羅始祖以下四人の王及び妃を祀った五陵(図5-⑧)、曲水の宴で名高い^{ボウセキテイ}鮑石亭(図5-⑨)の順に訪れている(写真16～18)。

財買井は、^{ユンシン}金庾信の邸宅にあったと伝えられている井戸である。『慶州の傳説』によると新羅第二十七世善徳女王の時、女王は金庾信に大將軍の印綬を与えて二万の兵を引き連れて百済との戦いに向かわせた。庾信は、自分の邸宅に立ち寄ることもできないくらい多忙な日々をすごした。そんな主人が家に立ち寄ることもせず家の前を通過する様子を見て、家人たちが涕泣して見送っていたところ、庾信は一杯の水を邸宅の井戸から汲んでこさせてグッと飲み干し、「吾が家の水尚舊味あり(自分の家の水の味は昔と同じだ)」と大笑いした。そして、勇ましく進軍を再開したという話が伝わる井戸である。

それから、川邊は一度市街地へ引き返した後、新羅第二十九代武烈王陵(図5-⑩)に参拝し、入口右側の^{トコ}龜趺と、その上にわずかに残る六龍寶球の彫刻笠の精巧で緻密な姿に驚いている。また、鳳凰台(図5-⑪)等を見学した後に博物館慶州分館(図5-⑫)を訪れ、石器時代から各時代に渡って収集された資料を見学しているが、特に玩具との関係から、埴輪の人や馬に興味を持って見学する様子が記されている。

川邊は、慶州駅から午後0時55分発の釜山行きに乗り、午後4時20分に着いた。そして、清永に見送られ、午後9時5分発の奉天行きの列車に乗車し、京城へ旅立った。



写真16 雞林

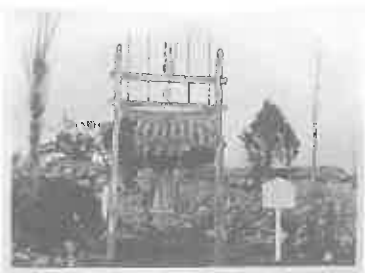


写真17 財買井



写真18 鮑石亭

『慶州の傳説』(1938第七版 著：大坂六村)〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

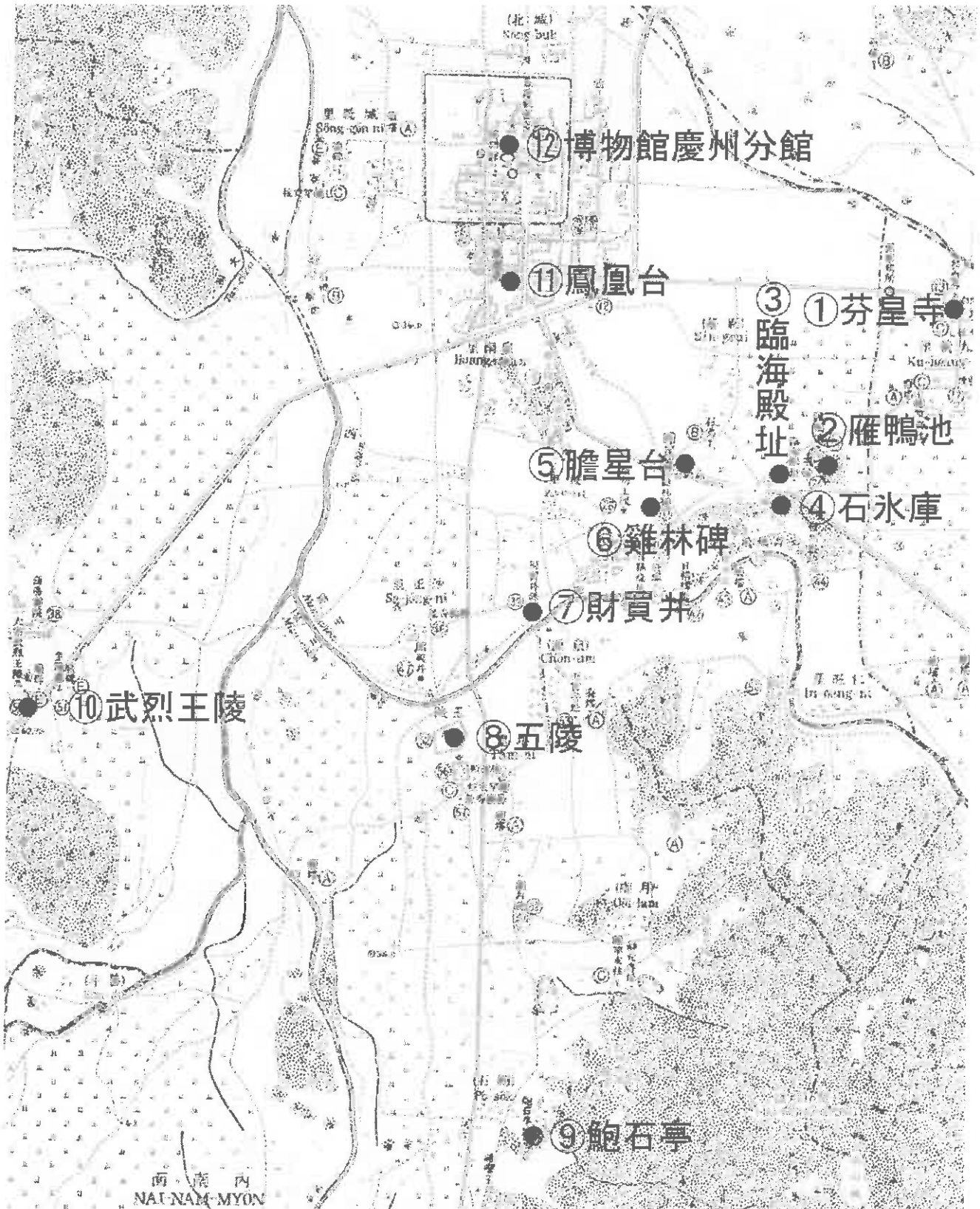


図5 川邊正己訪問地位置図(慶州)(1:25,000)〈朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地形図集成:柏書房〉

(10) 京城府内めぐり(昭和13年5月19日)

車中一睡しまして早朝京城驛着。直ちに驛前に清永さんから御紹介を頂きました波多野長政氏を御訪問致しました。九時過波多野さんと一緒に驛前から遊覧バスに乗りまして先づ市内を一巡しました。・・・(中略)・・・李朝最古の建

物たる南大門脇を通り朝鮮神宮に参りました。・・・(中略)・・・伊藤博文公を祭る博文寺に参り、次いで經學院へ行きました。・・・(中略)・・・此處から南へ少し行くと昌慶苑があります。・・・(中略)・・・ここにある水時計は大きなもので、興味深く拜見致しました。總督府を左に見つゝ、その裏の景福宮に参りました。此處は王宮の跡で現在は勤政殿思政殿慶會樓等しか残つてゐず、勤政殿前の石の廣場はその昔朝見の大禮を行はれた處だそうではありますが、李王家水時計殿の内部はたゞ広いだけでガランとした物淋しいものでありました。慶會樓は周圍に池を過らし如何にも麗しく、昔宴會場として使用されたといふ名にふさはしいものでありました。又景福宮内には總督府博物館があり、樂浪三韓の發掘物から各時代の佛像、陶漆器、書畫等が整然と列べられてありましたが・・・(中略)・・・最後の遊覽所は德壽宮・・・(中略)・・・さすがにその昔をしのぼすものがあります。之で遊覽の一巡を終へましたので、波多野さんに御案内して頂きまして三越支店や京城の銀座ともいふべき本町にある土産物店海市に入り土産物や玩具類を少しく購ひました。三越でみた白樺彫りの朝鮮人形はたゞ朝鮮の風俗をうつしてゐるといふに止まります。海市の方は種々な玩具があり、砧棒、木靴、木虎、土虎、兀然堂、泰上老君、太鼓、福神、風俗人形、木雁、新婦禮轎車、天下大將軍等を見ました。此の中風俗人形は朝鮮服に土の首人形を突さす様にしたもので、朝鮮服が手前味噌とでも云ふ可きものかと思ひます。

(『土偶志』・第五期一號 『鮮滿北支行(其ノ二)』より引用)

釜山を發った川邊は、京釜本線の汽車に乗り釜山から京城に向かったが、当時の京釜本線は朝鮮總督府鐵道局が經營しており、18日の夜9時5分に釜山を出発し、翌19日の朝8時に京城駅に着く。約450km、約11時間の汽車の旅である。

ところで、川邊と京城で会った波多野長政氏(以後：波多野)とは、どのような人物であったのだろうか。『土偶』第三號(1935)(写真20)に、「伏見人形」について写真解説(写真21)を寄稿しており、釜山郷土玩具同好会の「同好會同人」の頁に氏名と住所が掲載されている(写真22)。また、清永が同号の「編輯餘話」(写真23)に、「同人波多野氏が勤務の関係上京城へ榮轉されました、一抹の淋しさが加わりましたが、矢張り引続き同人として活躍して貰えることになって居ります。京城なれば朝鮮の在来の郷土玩具も或る程度發見出来ること、同氏の快報を鶴首します」と記しているように、元は釜山在住の郷土玩具蒐集家で、転勤後も活動を共にしていた人物であるこ



写真19 李王家水時計『鮮滿北支行(其ノ二)』
〈鹿児島県歴史資料館黎明館蔵〉



写真20 『土偶(第三號)』表紙



写真21 「伏見人形」
写真及び解説文

写真21～24 『土偶』第三號〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉



写真22 「同好會同人」欄(右から二番目、波多野氏)



写真23 「編輯餘話」欄

とがわかる。

川邊と波多野の両名は、午前9時過ぎの遊覧バスに乗り、南大門、朝鮮神宮、博文寺、經學院、昌慶苑、總督府、景福宮（李王家水時計殿など）、總督府博物館、德壽宮をめぐる（図6-①～⑨）。

その後、波多野の案内で三越支店（図6-⑩）や、京城の銀座といわれる本町にある土産物店

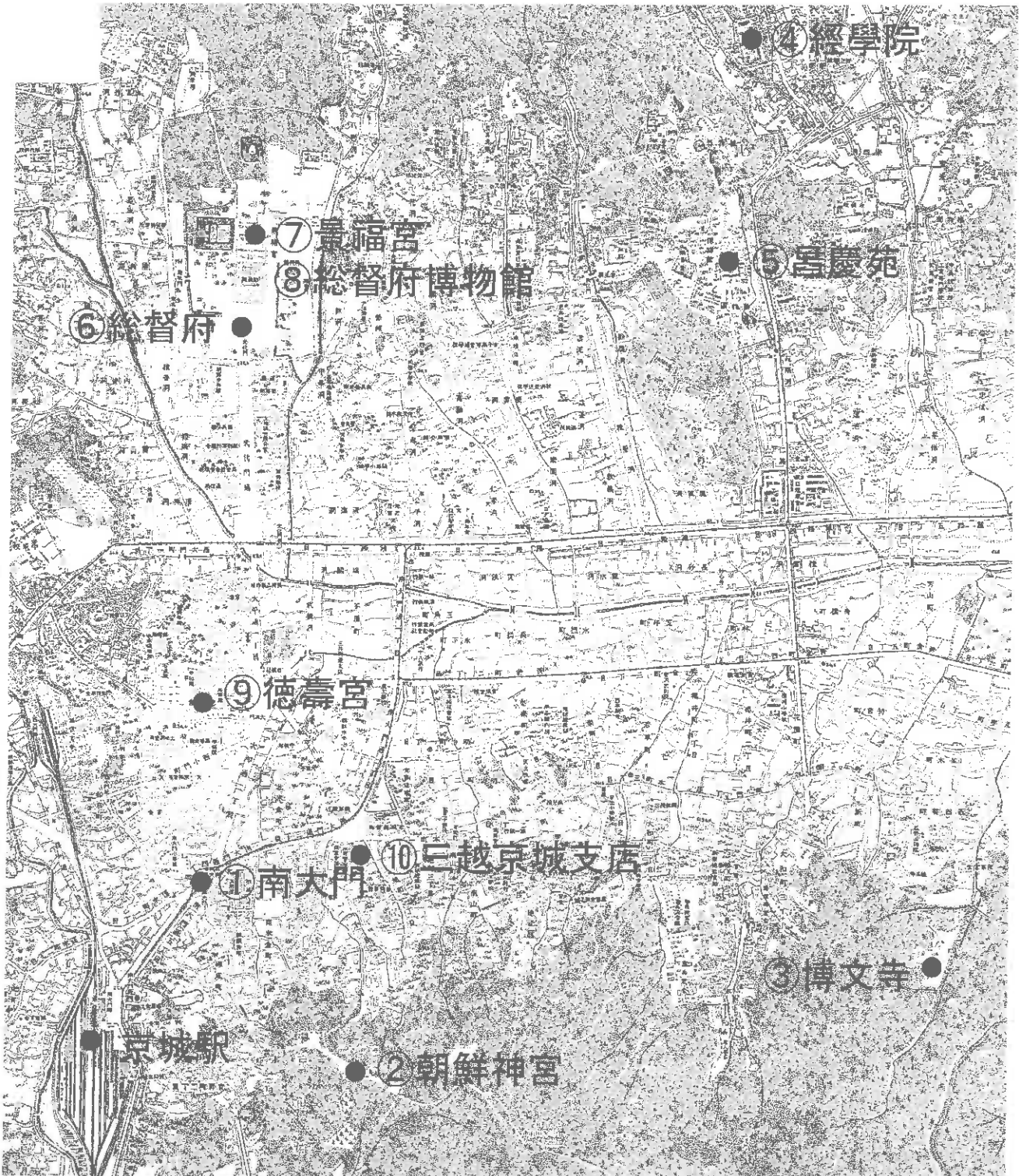


図6 川邊正己訪問地位置図（京城）（1：20,000）〈朝鮮總督府作成一分一朝鮮地形図集成：柏書房〉

「海市」に入り、土産物や玩具類を少し購入したらしい。三越で見た白樺彫りの朝鮮人形については、「たゞ朝鮮の風俗をうつしてあるといふに止まります」と物足りなさ感じたような記述がみられる。海市では、砧棒、木靴、木虎、土虎、兀然堂、泰（太）上老君、太鼓、福神、風俗人形、木雁、新婦禮轎車、天下大將軍等を見ている。しかし、朝鮮服に土の首人形を突き刺すようにした風俗人形については、「朝鮮服が手前味噌とでも云ふ可きものか」と辛口の感想を述べている。

7 「川邊コレクション」における朝鮮玩具

「川邊コレクション」の朝鮮玩具を、『鮮滿北支行（其ノ二）』の文中に記されている玩具やそれに類するものに絞って調査をすすめると、該当する朝鮮玩具34点が収蔵されていることがわかった。

天下大將軍が1点、天下大將軍と地下女將軍の対が3点、福神、大福神、福神面がそれぞれ1点ずつの計3点、兀然童が11点、閑古鳥が2点、木雁が1点、木靴が2点、砧棒が2点、京城木彫り風俗人形が7点、太鼓が1点、京城婚礼式が1点である。それぞれの写真資料を掲載することとする。



写真24 「併合後の新玩『日本郷土玩具 西の部』(1930：昭和5年) <鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵>

武井武雄は、『日本郷土玩具 西の部』(1930)の朝鮮章において、「併合後の新玩（左端六寸）」という朝鮮玩具9体の集合写真を掲載している（写真24）。福神、天下大將軍・地下女將軍、兀然童の蛙、閑古鳥、木彫りまたは張子の虎である。それらはモノクロ写真で掲載してあるので、色調は正確に確認できないのが残念であるが、「川邊コレクション」に収集されている資料と、形や彩色がよく似ている点が興味深い。

それぞれの朝鮮玩具について、清永の記した『朝鮮の郷土玩具 土偶志臨時號』(1939)や、尾崎が記した当時の朝鮮玩具の色彩を知るうえで貴重な資料である『朝鮮玩具圖譜』(1934)。そして、『土偶』・『土偶志』に連載された「鮮玩閑話(1～13)」などの、文章や版画資料を参考に、各玩具についての概要を記すこととする。

(1) 將軍標

もとは道路の守護神で、日本の道祖神のようなものである。疫病や悪鬼が集落に進入するのを防ぎ、農作物の守り神とされていた。それを玩具にしたものが將軍標であり、当時は朝鮮土産の花形であった。木製で、上部に顔を彫刻してあり、胴部に「天下大將軍」「地下女將軍」の書き込みがある。「川邊コレクション」の1体、3対ともに同じ書き込みがある。天下大



写真25
天下大將軍



写真26
天下大將軍・地下女將軍

将軍（写真25）は、木製削りだしで制作され、高さ21.3cm、幅8.5cm、奥行5.5cmを測る。耳と頭部の横木を釘で固定してある。目鼻に鉛筆による縁取りが残る。天下大將軍・地下女將軍（写真26）は、一木からの削りだしで、天下大將軍は高さ9.7cm、天下女將軍は高さ9.1cmを測る。底部裏に二体とも「朝セン」の書き込みが残る。天下大將軍・地下女將軍（写真27）は、頭部の横木のみを、釘で固定されている以外は、削りだしで作られ、天下大將軍、地下女將軍ともに高さ10.4cmを測る。底部裏に二体とも「76」の書き込みが残る。同じく天下大將軍・地下女將軍（写真28）は、一木から二体を削りだして作られている。高さ12.0cm、底径4.2cmを測る。「朝鮮」の書き込みがある。



写真27 天下大將軍・地下女將軍 写真28 天下大將軍・地下女將軍
 〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

(2) 大福神, 福神, 福神面

「鮮玩閑話(9)」に、「朝鮮の福神の姿はグロテスク」で、「凶相の前には、悪鬼も貧乏神も、たちどころに退散すると思えるほど」とあるように、「大福神」、「福神」の書き込みが無ければ、鬼と思ひ込みそうな姿である。「川邊コレクション」の



写真29 福神 写真30 大福神 写真31 福神面
 写真29～31 〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

2体も同様である。福神（写真29）は、木製削りだしで、高さ14.9cm、横6.3cm、奥行き4.5cmを測る。右手に笏を差し込む穴が加工されているが、笏は紛失によるものなのか実在しない。目鼻、牙及び舌は貼付けではなく削り出して作られているように見える。左足裏に「朝鮮」の書き込みがある。大福神（写真30）は、土製で高さ8.2cm、幅5.2cm、奥行4.5cmを測る。右手には「大福神」と記された笏を差し込むための穴が設けられているが、補修跡が残る。底部裏に「朝鮮」の書き込みがある。

福神面（写真31）は、顔の形から資料名を「福神面」とした。縦8.5cm、横9.0cmを測り、資料には「京城」の書き込みがある。

(3) 兀然童

日本における起き上がり小法師のようなものである。

しかし、起き上がる様子も、勢いよく起き上がるものは少なく、静止した状態で、直立することができない個体がある。

風俗人形と動物をモデルにしたもので、大き



写真32 朝鮮起き上がり小坊子『土偶（第貳期第參號）』
 〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

さは二寸から三寸程である。諸説があるが、『日本郷土玩具 西の部』(1930)によると、日韓併合後につくられたものと考えられる。

『土偶(第貳期第参號)』の写真解説(写真32)の7頁に「朝鮮起き上がり小坊子」として、写真に解説文が添えてあるが、その写真中の起き上がり小坊子2体が、「川邊コレクション」の「兀然童 猿」(写真34)と「兀然童 少女」(写真43)と、よく似ている。また、「兀然童 猫」(写真36)は、『鮮滿北支行』に挿絵として版画で掲載されている(写真33)ものと同一個体と考える。



写真33 『鮮滿北支行』挿絵
(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

また、『朝鮮玩具圖譜』には、「不倒翁」の名で10体の兀然童が図化され彩色木版画で掲載されている。ここでは、「川邊コレクション」の収蔵品と同じ資料名が付けられている。「兀然童 蛙」(写真45)と「兀然童 猿」(写真46)の2体の版画を掲載する。

「川邊コレクション」では兀然童を11体収蔵しているが、起き上がる動作が良好なものは、「猿」(写真34)、「少女」(写真43)、「蛙」(写真37)の三体のみで、残りは、倒されて後、直立して静止する動作がおぼつかない。「猿」、「少女」のみ、底部に「朝鮮」の書き込みがあり、他は「京城」と書き込んである。



写真34 兀然童 猿 写真35 兀然童 虎 写真36 兀然童 猫 写真37 兀然童 蛙 写真38 兀然童 河童① 写真39 兀然童 河童② 写真40 兀然童 男①
 写真41 兀然童 男② 写真42 兀然童 女 写真43 兀然童 少女① 写真44 兀然童 少女② 写真45 不倒翁 七(『朝鮮玩具圖譜』第一六圖) 不倒翁 九(『朝鮮玩具圖譜』第一八圖)
 写真34～46(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

(4) 閑古鳥

張子にアシの軸を付け、軸を吹けばホー、ポーというような音を出す。

『朝鮮玩具圖譜』には、「閑古鳥」の名で2体が彩色木版画で掲載されており、「川邊コレクション」に収蔵されている「閑古鳥」と比較してみる。「閑古鳥①」(写真47)は、長さ7.0cm 幅1.9cmを測り、葦を直接張子に接着してあるが鳴りが悪い。「閑古鳥②」(写真48)は、長さ14.0cm 幅3.8cmを測り、葦を紙で張子に巻きつけて接続してあるためか鳴りが良い。いずれも腹部に「京城」の書き込みがある。一方、『朝鮮玩具圖譜』の閑古鳥は、どちらも葦を紙で巻き付けた物であることがわかる。



写真47
閑古鳥①



写真48
閑古鳥②



写真49
閑古鳥（『朝鮮玩具圖譜』
第二三圖）



写真50
閑古鳥（『朝鮮玩具圖譜』
第二四圖）

写真47～50 〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

(5) 木雁

婚礼の際に用いられる道具であるので、玩具というよりも結婚儀礼を行うための道具とした方が正しいが、「鮮玩閑話(5)」によると「玩具に取り入れておいても差し支えない様に思える」ほど、その使用方を全く知らない人が見れば、玩具と見間違う作りである。



写真51
木雁



写真52
鮮玩木雁（土偶志第七期二号）

写真51, 52 〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

『土偶志』第七期二號（1942）に小野が「鮮玩木雁」（写真52）の名で自作の版画を寄稿しているが、「川邊コレクション」に収蔵されている「木雁」と較べてみると、色づかいなどが、とても良く似ている。「木雁」（写真51）は、高さ16.1cm、幅8.7cm、奥行25.1cmを測り、胸部に青文字で「子孫昌盛」と筆で書かれている。一木削り出しにも見える胴部に、頭部を接続して製作されている。

(6) 木靴

木靴は木をくり抜いてつくられたもので、底にW字型の歯がついている。玩具の木靴は、これを模して土産品として作られたもので、



写真53 木靴①



写真54 木靴②



写真55

写真53～55 〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉 木靴（『朝鮮玩具圖譜』第四八圖）

長さは5～7cm程度で、花模様などの模様が施されている。『朝鮮玩具圖譜』によると、合併後に日本人が作り出した創作玩具である。

「木靴①」（写真53）は、高さ8.8cm、幅6.1cm、長さ15.8cmを測り、玩具としては大きく、幼児用としての実用性を備えているようである。靴底に「京城」の書き込みがある。「木靴②」（写真54）は、高4.2cm 幅2.5cm 長さ6.6cmを測り、玩具としては一般的なサイズである。靴底には「朝セン」の書き込みがある。

(7) 砧棒

当時、朝鮮の婦人が、水辺で洗濯物を叩いて洗濯をするときに用いる60cmほどの砧棒を模した玩具（写真56、57）で



写真56 砧棒①
写真56～58



写真57 砧棒②
（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）

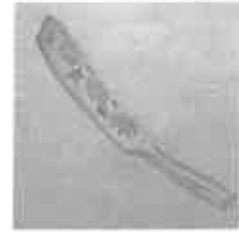


写真58
（『朝鮮玩具圖譜』第四七圖）

『朝鮮玩具圖譜』によると、合併後に日本人が作り出した創作玩具である。

(8) 風俗人形

「恭上老君」（写真59）は、木彫りで高さ13.3cm 幅5.1cm 長さ17.6cm、縦10.1cm、横1.0cm、奥行0.7cmを測る。道教の思想が反映されたものである。『土偶志』第四期第一號（1938）に板祐生氏（以後：板）が寄稿した版画「鮮玩木彫泰上老君」（写真66）とよく似ている。



写真59
泰上老君



写真60
官人



写真61
頭に荷物をのせた女



写真62
荷物を背負った老人



写真63
チマチヨゴリの女性



写真64
役人風の人物



写真65
白衣の老人



写真66
鮮玩木彫泰上老君
『土偶志』（第四期第一號）

写真59～66（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）

「官人」（写真60）は、木彫りで高さ8.6cm、幅3.9cm、奥行3.2cmを測る。他の風俗

人形と比較してサイズが一回り大きく、着色と技工に緻密さが増す。

「頭に荷物をのせた女性」（写真61）は、高さ7.8cm、底径1.8cmを測る。「荷物を背負った老人」（写真62）は、高さ6.9cm、底径0.9cmを測る。「チマチヨゴリの女性」（写真63）は、高さ7.0cm、底径1.8cmを測る。「役人風の人物」（写真64）は、高さ6.8cm、底径1.8cmを測る。「白衣の老人」（写真65）は、高さ7.5cm、底径1.8cmを測る。写真60～65は、いずれも原木から削りだして作られており、原木の木肌が台座部分に残る。

(9) 太鼓

太鼓(写真67)は高さ8.0cm、直径19.0cmを測り、皮と木で作られている。皮は鉄製の輪と17本の鋸で表裏ともに固定してある。音質の調整は簡単にはできず、やはり玩具用として製作されたのであろう。皮面の中心には反時計回りの巴紋が赤・緑・黒三色で描かれている。



写真67

太鼓

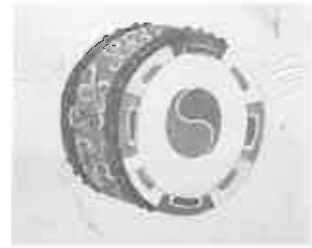


写真68

太鼓(『朝鮮玩具圖譜』第五六圖)

写真67, 68(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

『朝鮮玩具圖譜』第五六圖(写真68)に描かれた太鼓は、同じ反時計回りであるが中心に対極円が描かれている点が異なっている。

(10) 京城婚礼式

「京城婚礼式」(写真69)は、高さ8.2cm、幅9.4cm、奥行14.7cmを測る。乗物は竹と紙と木で作られ、色付けは丁寧である。人形は土でつくられており、厚さ3mmの合板で作られ黄色に着色された台座に、串に刺して接着剤で固定されている。人形の高さは、3.0cm~3.7cmで、袖などは、紙でつくられ接着剤で貼り付けてある。台座の裏底に「京城」の書込がある。



写真69 京城婚礼式

(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

8 おわりに

今回の調査で、75年の歳月を越えて『鮮満北支行』と手紙資料、朝鮮玩具を用いて川邊の足跡を振り返った。

これによって、当時の釜山府と京城府の玩具蒐集家と川邊との交流について、一部垣間見ることができたと考えている。

5月16日に滞在した釜山府では、清永とともに『土偶』創刊号から寄稿を続けていた石橋英雄、片岡文雄の両名と交流を持ったことが記されており、直接会うことで釜山郷土玩具同好会との交流をさらに深めたことがわかる。

5月17日に訪れた佛國寺と石窟では朝鮮の仏教文化に触れ、その鮮やかさに魅せられた様子、石窟内部の大仏や、四方を囲む花崗岩に彫られた石仏にも、強い興味を持ったこと等が記されている。

黎明館所蔵の「川邊コレクション」には、川邊が蒐集した様々な玩具類と合わせて、日本・中国・朝鮮の歴史、地誌、民俗、旅行案内等、諸分野の書籍が数多く所蔵されている。これは、川邊が郷土玩具蒐集という趣味を通じて東洋の文化全般に渡って知識を蓄えていた証といえよう。

5月18日は新羅の都であった慶州で史跡めぐりをしたが、その蓄えた知識を活かした有意義な一日となったことであろう。

また、「川邊コレクション」の中に『慶州の傳説』(1938)という、当時の観光誌が収蔵されてい

た。これは、川邊が旅の計画を立てる際に参考にした書籍であると考え。

5月19日に到着した京城府内でも、釜山府で玩具収集家の清永を訪ねたように、以前は釜山在住の郷土玩具蒐集家で、釜山郷土玩具同好会の「同好會同人」である波多野に連絡を取り、一緒に駅前から遊覧バスに乗車し、共に市内を一巡している。波多野を川邊に紹介したのは、清永であるので、ここ京城でも釜山郷土玩具同好会の持つ人脈が川邊を援助したことになる。

京城では、史跡や博物館のみならず、店に並ぶ玩具についての感想を記録しているので、川邊が朝鮮玩具について、どのような考えを持っていたのか、僅かではあるけれども知ることができた。

また、今回の調査において、「川邊コレクション」の朝鮮玩具と比較する対照として、尾崎が記した『朝鮮玩具圖譜』（1936）の木版彫刻印刷版を写真で掲載することができたことは成果といえよう。

今回の手紙資料の調査で、川邊を釜山郷土玩具同好会の清永に紹介したのが、久留米の小野正男であったことが明らかになったことも成果といえよう。

今回の調査報告では、あまり細かなところまで詳しく踏み込んで記述する機会は得られなかったが、小野は川邊が玩具蒐集家との交流を広げる際には仲介を行うこともあった（手紙資料1、2参照）。

また、川邊と小野の間では、小野が軍務についていた中国大陸の戦地での様子や、戦地を離れて久留米に戻ってからの様子、近況報告もふくめて手紙のやり取りを行っていたことが、他の手紙資料を読み解く中でわかってきた。詳細については別に機会を設けようと考えている。

これまで述べたように、川邊の旅はまだ京城までであり、旅の途中である。京城から満洲へと続く旅については、次回に記すこととする。

（よしいしゅういちろう 学芸専門員）

手紙資料

1

川辺正己様

寒中お見舞い申します。

本日は御無理御願ひ申す。それは垂水土偶について四百字詰位の御解説御執筆の件です。御承知かと存じますが、釜山の玩具人、清永完治氏（釜山府土城町一丁目六番地）主宰なる「土偶」誌の第三期一号（二月刊行）の写真解説のためです。

垂水の亀抱童子の写真に掲載するけど、この解説で困ってゐるから助けて呉れとのお言葉でしたが、それは川辺さんの外には適任者はないから川辺さんに御願ひしてみようとお返事してあります。

清永完治氏は三十七八の好男子で、駒型玩具の蒐集家でもあり、朝鮮玩具の一人者でもあります、最近須知さんを通じて満洲玩具蒐集にも進むとありました。

土偶誌は年五六回発行の豪華版で十頁に亘る写真（ベスト型）とその解説、それに玩具記事満載、表紙は板さんの孔版、口絵として手摺り版両数葉（今後十枚）を和綴にしたもので、読む本であり見る本でもあります。清永さんも「川辺さんにお聞きしてはと存じますが御交誼を願ふて居ませんし」とありましたのでよく川辺さんのこと御紹介して御便り致しておきましたので、今後共清永さんと御交誼の程私からも御願ひ申して止みません、

右の様な次第ですから垂水土偶に就いて川辺さんの御蘊蓄を傾けて御執筆下さいませ様改めて御願ひ申します。先は御願ひかたがた清永さんをご紹介申します。

壱月廿六日 小野正男

2

川辺正己様

照ったり降ったり変調なお天気が続きましたが一日一日と春らしくなって参りました。

本日は御便り拝受し御仰せ拝誦致しました。清永さんから「土偶」誌既刊の分まで拝受なさいました由御慶び申します。

「土偶」誌は御覧の様に趣味誌中の豪華版と私も前々から存じておりましたが、此の度九州玩具界の雄、川辺さんが「土偶」誌の会費としてデビューなさったこと「土偶」誌の読者全て喜ぶことでせう、私も板さんの御紹介で、清永さんと御交誼願ひ「土偶」の会費の一員として遇され恐縮してあります。折角の御親切で私も創刊号から拝受しましたが会費としては差上げず、当地方の郷玩をお礼の印しに差上げました、清永さんからは鮮玩の数々を贈られ、最近では御礼の差上げ様がなく、身の縮まる思いです。

そのため自分で出来る限りで御援助(?)させて頂き度いと存じ、拙稿、拙版画を「土偶」誌に寄稿してあります。清永さんとは一度は私宅で一度は梅林さん宅でお会いし、気持ちのいい方で私も喜んでその後深い交際を願ってあります。それですから川辺さんも「土偶」誌の会費として差上げなさらず、御礼として御地方の郷玩を贈りなされた方が、清永さんとしてもお慶び大きいと存じます。その外鹿児島、宮崎縣地方の郷玩について、或は今迄お会いなさいました愛玩家訪問記（東京、大阪その他の）でも「土偶」誌へ御投稿下さいませ様此の際私からも御願ひ申します。先は僭越ながらご返事申します。

三月九日 小野 正雄

挿図一覧

図1	川邊正己旅行行程図〈引用地図：朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地図集成：柏書房〉
図2	川邊正己訪問地位置図（釜山）〈引用地図：朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地図集成：柏書房〉
図3	『朝鮮宝物古蹟図録、第1』『現状実測図』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
図4	川邊正己拝観順及び佛國寺伽藍配置図
図5	川邊正己訪問地位置図（慶州）〈引用地図：朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地図集成：柏書房〉
図6	川邊正己訪問地位置図（京城）〈引用地図：朝鮮総督府作成一万分一朝鮮地図集成：柏書房〉

表一覧

表1	関釜連絡船金剛丸型資料（昭和13年当時）
表2	下関・釜山間航路旅客運賃

資料目次

資料1	大修理前の佛國寺の様子『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
資料2	東南より見た青雲橋白雲橋を中心とする大観『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
資料3	多寶塔『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
資料4	石窟外観『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
資料5	石窟外観（修復前）『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
資料6	石窟入口から本尊仏を望む『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉
資料7	石窟入口（修復前）『朝鮮宝物古蹟図録、第1』〈国立国会図書館ホームページから転載〉

写真一覧

写真1	鹿児島県指定有形文化財 玩具コレクション『川邊コレクション』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真2	『土偶』・『土偶志』全巻〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真3	『土偶』第三期一號表紙及び「垂水の土偶」解説文掲載頁〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真4	鹿児島市を中心とする汽車汽船發着時刻表 鹿児島市観光課（昭和14年11月15日改正）〈鹿児島県立図書館蔵〉
写真5	大阪四天王寺の張子馬『土偶志（第四期二號）』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真6	高松の上馬兵隊乗『土偶志（第四期二號）』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真7	ハルピンの泥馬『土偶志（第四期二號）』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真8	大阪四天王寺練物馬〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真9	桑名 馬乗鎮台〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真10	泥馬〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真11	『朝鮮の郷土玩具』（1939）表紙〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真12	清水 完治氏『朝鮮の郷土玩具』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真13	『この道とすじ 郷土玩具収集』（1987）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真14	『慶州の傳説』表紙〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真15	南山より月城を距て、慶州を望む『慶州の傳説』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真16	雞林 『慶州の傳説』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真17	財庫井 『慶州の傳説』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真18	鮑石亭 『慶州の傳説』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真19	李王家水時計『鮮滿北支行（其ノ二）』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真20	表紙『土偶』第三號〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真21	「伏見人形」写真及び解説文『土偶』第三號〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真22	「同好会同人」欄（右から二番目、波多野氏）『土偶』第三號〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真23	「編輯餘話」欄『土偶』第三號〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真24	「併合後の新玩」『日本郷土玩具 西の部』（1930：昭和5年）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真25	天下大將軍〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真26～28	天下大將軍・地下女將軍〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真29	福神〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真30	大福神〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真31	福神面〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真32	朝鮮起き上がり小坊子『土偶（第貳期第參號）』〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真33	『鮮滿北支行』挿絵〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真34～44	兀然童（狼、虎、猫、蛙、河童①、河童②、男①、男②、女、少女①、少女②）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真45、46	不倒翁 七（『朝鮮玩具圖譜』第一六圖）、不倒翁 九（『朝鮮玩具圖譜』第一八圖）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真47、48	閉古鳥①、閉古鳥②〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真49、50	閉古鳥（『朝鮮玩具圖譜』第二三圖）、閉古鳥（『朝鮮玩具圖譜』第二四圖）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真51、52	木雁、鮮玩木雁（土偶志第七期二號）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真53～55	木靴①、木靴②、木靴（『朝鮮玩具圖譜』第四八圖）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真56～58	枯棒①、枯棒②、枯棒（『朝鮮玩具圖譜』第四七圖）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真59～62	京城木彫り風俗人形（泰上老君、官人、頭に荷物をのせた女性、荷物を背負った老人）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真63～65	京城木彫り風俗人形（チマチョゴリの女性、役人風の人物、白衣の老人）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真66	鮮玩木彫泰上老君（『土偶志』（第四期第一號））〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真67、68	太鼓、太鼓（『朝鮮玩具圖譜』第五六圖）〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉
写真69	京城婚禮式〈鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵〉

1 参考文献

- | | | |
|---------------------|------|--|
| 釜山郷玩同好會 (清永完治) | 1935 | 土偶 創刊號 |
| 釜山郷土玩具同好會 (清永完治) | 1935 | 土偶 第二號 |
| ● | 1935 | 土偶 第三號 |
| ● | 1935 | 土偶 第四號 |
| ● | 1936 | 土偶 第二期第一號 |
| ● | 1936 | 土偶 第貳期第二號 |
| ● | 1936 | 土偶 第貳期第三號 |
| ● | 1936 | 土偶 第貳期第四號 |
| ● | 1936 | 土偶 第二期第五號 |
| ● | 1937 | 土偶 第三期第一號 |
| ● | 1937 | 土偶志 第三期第二號 |
| ● | 1937 | 土偶志 第三期第三號 |
| ● | 1938 | 土偶志 第四期第一號 |
| ● | 1938 | 土偶志 第四期第二號 |
| ● | 1938 | 土偶志 第四期第三號 |
| ● | 1939 | 土偶志 第五期第一號 |
| ● | 1939 | 土偶志 第五期第二號 |
| ● | 1940 | 土偶志 第六期第一號 |
| ● | 1941 | 土偶志 第六卷第一號 表紙は第七卷第壹號 |
| ● | 1942 | 土偶志 第七期第二號 |
| 日本国有鐵道 | 1971 | 日本国有鐵道史 第8卷 |
| 釜山府 | 1938 | 釜山府要覽 |
| 清永完治 | 1939 | 朝鮮の郷土玩具 土偶志臨時號 |
| 尾崎清次 | 1934 | 朝鮮玩具圖譜 |
| 加治木高等学校と諸委員会 (酒元麗子) | 1987 | この道ひとすじ 郷土玩具収集家 |
| 南滿洲鐵道東京支店 | 1939 | 朝鮮滿洲旅の栞 |
| 朝鮮總督府編 | 1940 | 朝鮮宝物古蹟図録, 第1 |
| 日本ユネスコ連盟 (平山郁夫 總監修) | 2002 | ユネスコ世界遺産年報No.7 (2002) |
| 毎日新聞社 (平山郁夫 總監修) | 2002 | 世界遺産 10 東アジア |
| 大坂六村 | 1938 | 慶州の傳説 |
| 武井武雄 | 1930 | 日本郷土玩具 西の部 |
| 尾崎清次 | 1983 | 玩具圖譜 第四卷朝鮮玩具圖譜 |
| 日本鐵道旅行地圖帳編集部編 | 2009 | 滿洲朝鮮復刻時刻表 附台湾・樺太復刻時刻表 |
| 鈴木文子 | 2009 | 『玩具と帝国』-趣味家集団の通信ネットワークと植民地』
『文学部論集』(佛敎大学) 第94号, pp 1-20 |

2 引用文献

- | | | |
|----------------|------|----------------------------------|
| 釜山郷玩同好會 (清永完治) | 1935 | 土偶 創刊號「編輯餘話」 |
| ● | 1935 | 土偶 第三號「編輯餘話」 |
| ● | 1937 | 土偶 第三期第一號「編輯餘話」 |
| ● | 1937 | 土偶志 第三期第二號「編輯餘話」 |
| ● | 1938 | 土偶志 第四期第三號『鮮滿北支行』 |
| ● | 1934 | 『朝鮮玩具圖譜』概説 |
| ● | 1939 | 土偶志 第五期第一號『鮮滿北支行 (其ノ二)』 |
| ● | 1939 | 朝鮮滿洲旅の栞「佛國寺」 |
| ● | 1940 | 朝鮮宝物古蹟図録, 第1 (国立国会図書館ホームページから転載) |
| ● | 1985 | 朝鮮總督府作成一万分一朝鮮地圖集成 |
- 木馬洞
- 南滿洲鐵道東京支店
- 朝鮮總督府編
- 柏書房

